

立岩真也による〈自由の平等〉構案の孕む触発力

——「能力をめぐる正義」考にとって——

西 口 正 文*

The Power of Incitement Possessed within the Project
Called *Equality of Liberty* by Shinya Tateiwa
—For the Thinking on Justice about Capability—

Masafumi NISHIGUCHI

構成 [序] 【【存在の自由】の平等】なる概念

[1] 私的所有を正当化することについての根拠薄弱さ

[2] リバタリアニズムの知的卓越と欺瞞

[3] 機会の平等へと志向するリベラリズム——その底が割れること

[4] ジョン・ロールズ『正義論』をいかに引き取るか

[5] 構案の起点・基点としての、【私の存在承認】と【他者の存在承認】との連関

[結びに代えて] 「能力をめぐる正義」考にとってのひとまずの礎石

【序】 【【存在の自由】の平等】なる概念

序-1. 「自由」概念と「平等」概念とを構成するに際しての前提——近代社会システム 構成上の半意識

《“自由が先か平等が先か”という問いかけ》

近代社会を構成する原理にかかわって、しばしば通俗的に表明される問いかけとして、“自由が先か平等が先か”がある。こうした問いかけを持ち出す論者の側には、自由と平等の相剋性もしくは両立しがたさを意識させよう、意識化の“必要性”を強調しよう、とする意図が込められていることになる。

《“自由が先か平等が先か”という関心の向け方を通用させる地盤》

自由や平等が論議的になる場合、何にとって・だれにとっての自由や平等が問われることになっているのだろうか。この点について考えてみるならば、ひとりひとりの活動にとっての——個体身体の活動にとっての——それだ、ということに気づく。そのとき、個体身体の活動はそれぞれの個体身体ごとに自立性をもつことがめざされ、そのことが実現可能だとみなされもし、したがってまた当の個体身体にその活動の成否や正・不正につい

* 人間関係学部 人間関係学科

ての責任が帰せられるべきものとみなされる。つまり、そうした論議に際しては思惟の出発点としてひとそれぞれの個体身体が——本来自立性を帯びてあるべき個体身体が——默示的に据えられているわけである。

論議のこうした構制からするならば、先程のあの問いかけ“自由が先か平等が先か”に対して、もし平等の方を優先すべきだとする答えに出会うとすればその答えに不自然さを感じ取りがちになり、もし自由の方を優先すべきだとする答えに出会うとすればその答えに健康さを感じ取りがちになるだろう。こうして見てくるときに、われわれにとってさらに気づくことのできるのは次のことだ。すなわち、“自由が先か平等が先か”という関心の向け方を通用させる地盤をなしているのは、まず、それぞれの個体身体がその活動を選択し取り組むにあたっての自由（活動的諸行為に取り組む自由）を重要視し、そして、活動的諸行為に取り組む機会についての平等を重要視すること、そうしてさらに、個体身体ごとに現われてくる（活動的諸行為の）結果における差異——格差——はそれぞれの個体身体に帰責されるとする、そのようなひとまとまりをなす意味秩序である。あらためてここで、自立性を具備しうるようにと期待された個体身体は、自由なる活動的諸行為によってもたらされた差異について、その最終的責任を帰属させようとする宛先にされるという点に、留意を促しておこう。こうした視軸からすれば、自由と平等は万人にとって無邪気に望ましきことだと見て済ませばよいのではなくなる。個体身体それぞれにとっては、〔一方における〕活動的諸行為の結果（成果）のありようと〔他方における〕社会的富や威信の個体身体への分配に関する報われ度合、これら双方の対応を厳格にしようとする原則を軸にして、自由と平等が関心の対象となってしまうことになり、そのようになさしめる必然性を、近代社会における通用的な論議の構制は胚胎しているわけである。

序-2. 〈ただのひととしての存在〉に視軸を向けること

前項に述べたような、近代社会における通用的な論議の構制に抗するかたちで、自由や平等を考えることは挫折を余儀なくされる運命にあるのだろうか。そうでもないと思われる考え方の筋道を（その概略を）示している論者がいる。立岩真也である。近代社会システム構成上の半意識に飲み込まれ埋没してしまうのではなく、その半意識を問題化するきっかけを我々に感知させてくれる、立岩による次のような着想は、注目に値すると考える。すなわち、取柄のあるなしにかかわらず、ひと（＝他人）の世話を——他のひとからの支援を——要するか否かにかかわらず、〈ただのひととしての存在〉をよいこととして承認する、承認したい、という着想。同時にここには、その承認の軽重を測るのを拒斥したい、という想念が伴っている。こうした思いこそは、本稿が考え継ぎつつまた独自に論究しようすることにとって、何よりも手がかりとなるだろう。

いまここに述べた想念に発する思惟のもとでは、〈ただのひととしての存在〉をよいこととして承認し合うために、その必要条件として、生存資源の分かち合いを為そうとする理路、これが浮上するに及ぶ。前項で挙げて示したような「半意識」の内部に看取された、「自由」と「平等」の関係づけ方に対して、これを脱却しようとするがゆえの分かち合いをなそうとする理路が、浮上するわけだ。そのことを立岩自身は〈【存在の自由】の平等〉への志向というふうに表現している（立岩、2004）のだが、本稿の問題関心に引きつけるかたちで表現し直すならば、こうした理路には、（所有秩序のあり方に焦点を合わ

せた場合の)私的所有に向けての、また(能力をめぐる正義のあり方に焦点を合わせた場合の)能力主義に向けての、根底からの問題化へと誘う思考の触発力が蔵されているように思われる。

序-3. 欧語に見出せる「所有」と「固有性」との兼用から問えること

《「自由」と「平等」の関係づけ方と「所有」概念》

自立性を帯びてあると観念された個体身体を単位にして、活動的諸行為の自由および活動的諸行為の機会平等をひとまとまりのものとして制度上保障すること、そのことを以って「自由」―「平等」の関係づけ問題进行处理しようとする近代(社会システム構成上の)思想にあっては、そこにさらに「所有」という概念が不可分の結びつきをもって現われる。個体身体の活動的諸行為に際してその対象となるなんらかのものごとを所有するということ、さらに活動的諸行為の所産(産出態)を所有するということ、それぞれの行為の目的や意味や価値にかかわって強く意識されることになり規範化されることになる。つまり、私的所有が近代社会システム構成において根本的な規範となるわけであり、そのもとで個体身体がなんらかのものごとを所有するということは、そのものごとを使用したり消費したり他の個体身体に譲渡したりなどのことを当の個体身体の意のままになしうということ、そしてその結果として生み出される利得や損失などが当の個体身体に帰属するということである。こうした私的所有を規範的基礎に据えてなされる自由な活動的諸行為の積み上げは、個体身体ごとの所有する富の大きな格差をもたらすことになるであろうこと、さらに富の偏在は富から疎外されたひとにとっての不自由を来すことになるであろうこと、そのことは容易に推察されるところである。

《“所有による自由”を問い直すために……property, Eigentum, propriétéの含意》

上述の事態を自明のことだと見做し済ますのではなくて、それに向けて根底的な問いを提起する手がかりを、われわれは欧語において「所有」を意味する単語がそれと識別しうるもう一つの意味を兼ねている点に、探ることができる。たとえば英語において、「所有」を意味するpropertyは「固有性」という意味をも兼ねている。ドイツ語におけるEigentumにも、フランス語におけるpropriétéにも、同様の意味の兼用が見出される¹⁾。この兼用に向けて次のような脈絡から視線を投じるとき、われわれはそうとうに重要な論題を探り当てることができるように感じ取れるのではないだろうか。その論題とはこうである。すなわち、所有を軸にして善き生を追求する場合には、あるいはそのような善き生の追求の仕方から自由になれない場合には、私的所有のもとでもたらされる所有の不平等がひとそれぞれの固有性へのまなざしを規定することになる、という論題だ。所有する財貨や能力の格差がひとそれぞれの存在価値への評価を左右することになるならば、そこには謂うところの固有性が所有によって従属させられる状況が出来るわけである。そうした状況は、近代社会システムの構成論理と無関係ではないはずだ。

[1] 私的所有を正当化することについての根拠薄弱さ

1-1. ジョン・ロックにおいて明晰に開示されることになった原則としての〈私的所有〉
いまの私達にとって(近代および最近代の社会世界に暮らす私達にとって)ふつうに想

定され受け容れられる所有に関する秩序観なるものは、人類史の起源にまで遡って遍くその存在が認められる秩序観ではない (Marshall Sahlins, 1972→1984. Jacques Attali, 1988→1994などにそのデータを探れば、見出すのに事欠かない)。学説史的にはジョン・ロックにおいて初めてその理説が明晰に開示されることになった私的所有という所有秩序観。これが近代社会世界に根深く定着し通用力を揮っていることを問題化するにあたっては、まずこのロックによる理説を取り挙げ、検討してみるのが、妥当な順路となるだろう。

私の身体は、私自身にとっての善き生を追求するための手段として、他者の干渉を全面的に排除して、自由に用い処分することができる、という規範意識。このような、いわば〈身体の私的所有〉と表示できそうな規範意識が、疑う余地のない準拠点とされる。簡略化して言えば、“私の身体は私のものだ”とするとところから、その身体に内蔵された意志や能力を使用して外界の無主物に対して働きかけ (労働し)、働きかけた結果としてもたらされる成果 (労働生産物・労働産出態) は私のものにほかならない。これが、ロックにおいて開示された私的所有秩序観の骨格を成す (ジョン・ロック, 1690→1968: 第5章, 特に32-36頁)。

1-2. 自存視された個体身体を所有し支配することを当然とし自明の前提とする想念、そしてそのような想念に、ゆらぎを孕みながらも、踏み止まろうとする立論構制…… (※)

ロックにおいて開示された私的所有秩序観に見て取れるのは、自存視された個体身体をほかならぬこの私が所有し支配することを——私自身の善き生を追求するための手段として使用し制御し処分することを——当然とし、自明の前提とする想念であり、そのような想念に依拠した立論構制だ。この立論構制がその後、三百年を優に超える期間ずっと通用力を揮ってきたわけであり、その通用力たるや強まりこそすれ弱まる気配は見えぬように想われる²⁾。

ところで、この私的所有の正当性もしくは妥当性を根拠づけることがなされえたのか？ このように問うならば、ロックにあってもその後のリベラリスト達にあってもはたまたリバタリアン達にあっても——ひっくり返れば私的所有秩序観に依拠しようとした論客達にあっては挙げて——、当の根拠づけがなされていないことを知ることになる。というよりもむしろ、ロックをはじめとする論客達にあっては根拠づける必要性が意識されてこなかったのであろう。私的所有とは、端的に、そして懐疑なく無条件に受け容れられるべき秩序だ、と彼ら論客達にはこれまでずっとみなされ続けてきたのであるから。

[2] リバタリアニズムの知的卓越と欺瞞

2-1. ジョン・ロックによる所有権の理説には、ロック流の熟慮の所産として付帯されたと推察しうるところの、「但し書き」による所有権の抑制が勘案されていたこと

前項での叙述の限りでは、ジョン・ロックが《その正当性・妥当性を満たす資格という点で欠落したままに・無根拠な措定から出発して》私的所有秩序観に立つ議論を推し進めたかのような印象を与えるかもしれない。だが、彼の議論展開に少しでも分け入って検討するならば、そのように単線を辿る議論域に留まっていたのではなかった事が見て取られ

るはずだ。というのは、私的所有秩序に制約を課そうとする「但し書き」およびそれに関連する幾重もの言及に、われわれは止目することができるのであるから。その但し書きとは、次のようなものである。

これ（……野兎のような無主物を発見追跡し捕獲するという労働を通して得られたものについてはその所有権が、当の労働を費やした者にのみ発生する、ということ【引用者＝西口による註】）に対しては多分次のような抗議がなされよう。もしどنگり、もしくは地上のその他の果実などを集めることによって、それらに対する権利が生ずるものとすれば、誰でも自分の欲するだけ沢山のものを独占できることになるだろう、と。これに対して私は、そうではないと答える。こういう方法でわれわれに所有権を与えるその同じ自然法が、この所有権をもまた拘束する。『神われらに万の物を豊に賜へり』（「テモテ前書」六章十七節）とは、靈感によって裏書された理性の声である。けれどもどの程度まで、神はそれをわれわれに与えたのであろうか。それを享受するためにである。腐らないうちに利用して、生活の役に立て得るだけのものについては、誰でも自分の労働によってそれに所有権を確立することができる。けれどもこれを越えるものは、自分の分前以上であって、それは他の人のものなのである。腐らしたり、壊したりするために、神によって創られたものは一つもない。世界には昔から豊富な天然資源があり、これを消費する人は少なく、そうして一人の人の努力ではこの資源のどんなに僅かの部分だけしか手に入れることができないことか。また他人に迷惑を与えても自分のために独占するといっても僅かなもので、とくに自分の用に供し得る範囲がその限度であるという理性の定めた限界内に止まるとすれば、そうなので、このようにして確立された所有権について争いのおこる余地はほとんどあり得ないであろう。（ジョン・ロック、1690→1968：第5章、第31節、36-37頁）

私的所有秩序を歯止めなく展開することの有効性を声高に叫ぶ現代のリバタリアン達の論調と対比すれば、そこに慎ましさを大いに感じ取ることのできそうなこの但し書き。これをロックは何故に銘記したのだろうか？ この問いそのものを主題化するかたちでロック自身が述べている形跡を見出すことはできないのだが、推察してみるならば、一つ前に据え置かれた内容上のまとめ（[1]）で論及した私的所有を正当化することについての根拠への引っ掛かりがロックの直観において作用していたのではないだろうか³⁾。つまり、私的所有秩序をば正当視しうるものとして深く得心するわけにはいかぬこと、他者の安寧なる存続を——他者の存在の安寧を、そしてここで敢えて論点先取の気味を帯びながらも提起しておくところの、ひと相互の関係のありかたに視軸を向けて問題化される【存在の自由】を——脅かしてまで私的所有を権利として主張することの正当性が、その拠って立つ足場の危うさ・脆さのゆえに、あらためて懐疑的検討に曝される余地あることに気づいていたからではないだろうか。

ここで我々は、少なくとも次のことを、本研究の行論にとって枢要性を帯びた認識上の一階梯として、確認しておこう。すなわち、ジョン・ロックによる所有権の理説には、ロック流の熟慮の所産として付帯されたと推察しうるところの、「但し書き」による所有権の抑制が勘案されていたことを。

2-2. 私的所有秩序の抑制を軽減し無化しようとする傾動が展開されること

前項で取り挙げたロック流「但し書き」の趣意——私的所有を秩序化することに対しては、他者の存在の安寧との相剋という関係的事態を重視する視座から、制約が課せられること——に向けては、それを真つ当に引き取って考え深めるというのではなく、それとは方向を異にして、むしろ、そのうちに孕まれていたゆらぎを封じ込むという角度をもって(※)を推進する方向を採る議論展開。これを積極的に図ろうとするのが、リバタリアニズムの理説である。その典型を、なによりもロバート・ノージック(1974→1985, 1992)に見ることができよう。予想されるように、(※)を特定の角度に推進するという方向を採る議論展開からすれば、かの但し書きの論題とする事柄は中途半端な妥協の産物とみなされることになるだろう。

2-3. 権原理論に基づいて提起される「保有物の正義」(……権原的正義)

ノージックは「保有物の正義」(＝財産保有をめぐる正義の原理)として、次の三つを提示する。①保有物の原始取得(誰にも保有されていないもの——無主物——の先占・専有)という原理、②強制なしの随意による、あるひとから別のひとへの保有物の移転の手續きに関する原理、③不正行為の匡正(矯正)という原理。そしてここに伏在するのは、自存する個体身体の発揮しうる活動における自由をこそ——したがって身体の私的所有をこそ——自然権という資格において(「保有物の正義」にとつての)抛り所に据えることができるものとして最重要視する考え方だ。そこから生じる、私的所有秩序に向けてのまなざしは、ロックに見られた立論構制をそこに孕まれていたゆらぎを封じ込むかたちで推進するものになるわけであって、同時にそれは、ロック流熟慮が入念に付帯した制約を無化することへと志向するものになる。

ロックの付帯した(私的所有秩序への)制約、これをノージックが軽減しそして無化してゆく議論脈絡について、その要点のみに絞って辿っておこう。ロックの付した但し書きの趣意をどう受けとめるか、に対してのノージックによる反応は、まず二様の含意への区分けというかたちをとって現われる。(a)あるひとがそれ以前には無主物であった「特定物またはその種の物」を専有するに到った結果として、他のひとがそのものの「専有を通じて自分の状況を改善する機会を失うこと」によって、他のひとの状況が悪化するという含意。(b)ある無主物に対するあるひとの専有の結果として、他のひとが「それまでは(専有しないまま)自由に使えたものが、もう使えなくなること」によって、他のひとの状況が悪化するという含意。(ノージック1974→1992: 296)

次いでノージックは、(件の但し書きの趣意への単純で素直な捉え方としてあらためて示すところの)「専有によって他の人の立場を悪化させてはならないという要請」に照らして、厳格なる要請のあり方としては、先記(a)・(b)いずれをも排除しなければならないとする考え方がありうると言う。それと比べて弱い要請のあり方としては、(b)は排除されるべきだけれど(a)は排除の対象とするに及ばないとする考え方がありうると言う。そのように言った上で、「弱い要請」の方がノージックの求める正義(＝権原的正義)に合致するはずだ、と議論を進める。その理由づけはこうである。すなわち、無主物の先占・専有をなしがたい状態になることがそのまま「他の人の状況を悪化させる」ことにつながるわけではない。むしろ、活動水準が高く生産性において優れた少数者が専有するに到った状態

の方が、全体としての富を豊富に産出できる。さらには、いっそう豊富になった富を活用しうるように近づくことのできる機会を、権原的正義——保有物の正義——にもとづいて個人の活動の自由度が高度に保障されるという条件下で、獲得できることになる。つまり、個体身体活動の自由をなによりも大切にするという発想に軸心をおきつつ、その活動の自由と富の使用機会増大とは両立しうることになる。ノージックの言表をそのまま挙げておこう。「私有財産の専有が『充分な量と同等の質のものが残されているべし』という但し書きの背後にある趣旨を充足するのだ」。「市場システムの自由な機能は、ロック流の但し書きと実際に衝突するものではない」。(ノージック 1974→1992: 296-306)

2-4. 私的所有秩序の実定法制化された形態としての私的所有権——私有財産の保有権——の正当化は、はたして充分な妥当性を具備してなされたか？

ノージックの所論に基づくならば、《外的侵略と内的犯罪からその領域内居住者たちを保護することに限定した機能を演じるためだけの権限を有する》最小国家としての「夜警国家」のみが正当化される。保有物の正義（権原的正義）によれば、中央分配機構として機能することになるような国家による再分配は、人々の間での恵まれ度合の格差を——個体身体活動の“自由”の帰結としてのそれを——縮小すべく財・資源の移転を強制的に行なうことになるので、不当な国家のあり方だとみなされるわけだ。

ここで問われるべきはしかし、自然権に発するとして提起される私的所有権の正当化が充分な妥当性を具備してなされたのかどうか、であろう。リバタリアニズムに対する原理的批判の骨格だけを示そうとするこの箇所では、立ち入った論及を省くことにするが、かわり合いの中での存在・間柄においてこそ捉えられる存在としてのひとの存在、という視座からすれば、上記問いに向けては否と答えなければならない。

とはいえ、私的所有秩序しかありえない、というふうに居直ったところから、その秩序を徹底する方向に論理を透徹させる、という知的活力の面から見れば、われわれがノージックにその典型を見出せるリバタリアンの卓越を、高く評価することができるであろう。その評価は同時に、〈自由〉をこのうえなく大切なものと強調しながら、いわば間柄的存在の——第一次的には関係態において見出し捉えようとする存在の——自由をシステムティックに圧殺するに到る事態、これに視軸を向けようとせぬリバタリアンの欺瞞に、留目することでもある。

【3】 機会の平等へと志向するリベラリズム——その底が割れること

ここまでは、本研究の前哨をなす事柄であった。ここからはいよいよ本研究の本論へと歩を進めようとする心算である。とはいえ、叙上の論及を受けていきなり本論の中心部に入り込むには、いまだ備えに欠くところ多大なることに想到する。そこでこの[3]においては、本論の入口に位置する討究として、(立岩その人の論考を手がかりにしその跡をなぞるようなかたちで)現代リベラリズムの思惟地平を把握すべく試みよう。けだし、能力をめぐる正義に照準する問題構成のあり方を探ろうとするにあたって、立岩の論考には(筆者の見るところ)ずば抜けた思索の深化が読み取れるから。

平等論への傾斜を帯びた正義の探究ということに真摯に取り組んできた現代リベラリス

ムは、この国でもいわゆる民主主義的教育知・教育学知——教育的理性——の正統として構築され蓄積されてきた知の体系に結実している。そのように言っても過言ではないであろう。時期で言えばそれは既に前世紀70年代にはほぼ体系立てられていたと見てよいであろう。今日的な学知の流れに眼を転じれば、筆者の見るところ理論史の上で退却するような内容において、“実証（主義）”的データを収集し——（むろんの確に言うとすれば）構築し——社会科学風に処理し解釈する作業を通じて新たな意匠を凝らした教育的理性が、先行するその表層を焼き直すという行程を経て、アカデミズムにおける権威を背景に各種メディアを効果的に駆使し広範な影響力を発揮してもいる。

そのような教育学知の状況を勘案するとともに、さらに社会思想領野にまで視界を広め深めて、平等論への傾斜を帯びた現代リベラリズムの思惟地平を対象化するならば、立岩が鋭く剔抉しているように（立岩，2004：第5章），その核心部において実質的な機会平等を追求していることがわかる。「機会の平等のリベラリズム」という表現に集約することが多分できるであろう現代リベラリズムの思惟地平は、互いに独立したものではなくて相互に関連しあっている次の三つの要素を総合したところに、捉えることができると見てよいだろう。（α）【生育環境や生活環境などの】環境的条件の平等化《→個体の能力開発のための機会を実質的に平等化することを図る》。（β）個体の能力開発に最大限尽力すること《→（α）の上にさらに、個体の能力を向上させて高レベルに揃えていくよう、“教育的はたらきかけ”の営為に意図的組織的計画的に努力することを重視する》。（γ）責任の帰属先の重要視および自己責任以外の責任帰属をめぐる、利害上の有利・不利の問題化が先鋭化すること《→人為的努力の行き着く先には、各人の努力の相違による処遇の相違という内実での分配的正義が実現するはずだ、という想定が表出することになる》。

省みるならば、当事者にとっての“いわれなき”差別感や不公正感から離脱しうる状態を達成する、という目標意識のもとにいわば理想的内容を体現し得たかのような私的所有秩序を到達点に据えていることに、気づくだろう。

〔4〕 ジョン・ロールズ『正義論』をいかに引き取るか

4-1. 現代リベラリストのめざす正義に纏わる桎梏

前章で考え述べたことをふまえて、現代リベラリストの思惟地平をあらためて、本稿の問題設定に引きつけるかたちをとって確認するならば、次のように整理できるだろう。各人にとっての環境条件を高いレベルで平等化し、各人の能力開発を効率よくして、よって以って各人の能力を高水準にまで開発しつつ能力格差を縮小する。彼らの立場からすれば、基本的な社会構造-機能に向けてこのような要請が発生し続けるわけだが、その要請には私的所有の自明視が纏わり付いており、私的所有秩序の内で正義を探求しようとする回路に収まってしまうことになる。そうなると、能力を高水準にまで開発すべし、という社会構造-機能上の要請に応えることのできない存在者は、その存在の自由を承認されがたくなるであろう。まさにこの点に、現代リベラリストのめざす正義に纏わる桎梏を見定めることができる。このようにして、いまや我々が推察することができるのは、露骨であれ抑制されてであれいずれにせよ、私的所有を根底に据える社会世界を前提としてその内で正しくあらうとしたこと、そのことに、現代リベラリストのめざす正義に纏わる桎梏が

由来する、ということだ。

4-2. ジョン・ロールズの有する起爆力

この社会世界の内にあることゆえの、正義に纏わる桎梏。これは如何ともしがたい性質のものに想われ、そこから逃れる方法を探り出すのは至難に見える。

ところで、この至難に挑んだ先人の思索の跡を探るならば、件の桎梏から身を解き放つための方法的構案を、我々はジョン・ロールズに見出すことができる。ロールズその人は、原初状態における「無知のヴェール」のもとにおいてこそ、〈正しさ〉(正義)をもたらすことのできる原理を、いわば超越論的方法を以って——正しさを覚識し判断するための可能性条件に迫り把握する方法を以って——獲得しようとしている。ここで、ロールズによる言明を取り挙げておこう。

それは(——原初状態は【引用者による補註】)、ある正義の概念をもたらしように特徴づけられた、純粋に仮説的な状況であると理解される。この状況の本質的な特徴の中には、誰も社会の中での自分の位置や階級上の地位あるいは社会的身分を知らないばかりでなく、生来の資産や能力、知性、体力、その他の分配における自分の運も知らないということがある。そして、当事者は自らの善の概念あるいは自分の特異な心理的性向を知らないことまでも、私は仮定しよう。正義の諸原理は、無知のヴェールの背後で選択される。このことが、諸原理の選択において、自然の運あるいは社会環境の偶然性の結果によってだれも有利にも不利にもならないことを保証する。全ての人が同様な状況に存在しており、だれも自分に特有な状態に都合の良い諸原理を立案することはできないから、正義の諸原理は公正な合意あるいは交渉の結果である。原初状態という環境、つまり、あらゆる人の相互関係の対称性が与えられると、この初期状態は、自身の目的をもち、私はそう仮定するが、正義感をもつことができる合理的存在としての、つまり道徳人としての個人の間では、公正である。(ジョン・ロールズ 1971→1979: 9-10)

原初状態を特徴づける、いくらか普通とは違う条件によって惑わされてはならない。ここでの着想は、正義の諸原理を立証する議論に、したがってこれらの原理それ自体に課することが合理的であると思われる制約を、単に鮮明にすることだけである。こうして、諸原理の選択において、自然の運や社会環境によって何人も有利になったり、不利になったりするべきではないということは、合理的でかつ広く受け入れられるように思われる。また、自分の境遇という環境に合った諸原理を仕立てあげることが不可能であることも、広く合意されているように思われる。更に、特定の性癖や熱望、そして人々の自分の善についての概念が採用される諸原理に影響を及ぼさないということを、保証しておくべきである。……(中略)……このようにして、ごく自然に、無知のヴェールに至る。この概念が表わそうとしている、議論に加わる拘束を心にとめておくならば、無知のヴェールという概念は、何の困難も引き起こすことはないはずである。(ジョン・ロールズ 1971→1979: 14)

ここに挙示した言明に沿う形で(その言明が示している制約の限りにおいて)選択され獲得される正義の原理は、私的所有秩序にはなじまない、というよりもむしろそれを斥けることになるだろう。私的所有に正しさはないこと、そのことを端的につかみ取ることの

できる言明だ。これに向けて、“現実性を欠く”などという非難ははたして成り立つのだろうか？

4-3. ロールズの精彩を自ら毀損する「格差原理」、その前面への浮上は何故にもたらされたか

いましがた論及したこと、すなわち、原初状態において「無知のヴェール」を被せられてある条件下で〈正義の原理〉を発見し選び取ろうと立ち向かうという事態の特質——〈正義の原理〉を発見し選び取るにあたっての思惟の構えがいわば純化された正しさへの志向を強く備えている、という特質——この特質がロールズの所論において貫徹されるわけではない点に、視軸を差し向けるべき段である。この世界の内にあることゆえの、正義に纏わる桎梏から、正当にも身を解き放とうと歩み始めたはずのロールズは、彼の理論体系の核心をなす「正義の二原理」を描出するところでは、その第二原理を「格差原理（……マクシミン・ルールとしての性格を持った格差原理）」というかたちを以って提示することになった。その内実には、この世界の内にある欲望系のあり方と調和・親和を図ろうとする契機が抜きがたく刻印されているのであり、それゆえに、初発の方法的構案を挫折に至らしめるような性格のものであったと判断される⁴⁾。そのことは、彼の理論構築がリベラリズムに根を張って立論するところから出来た挫折もしくは停滞を示している、そのように見ることもできるかもしれない。しかし、そのような見方に止まって済ますのではなくて、ここに謂うところの挫折もしくは停滞の根因を探ろうとするにあたってより大切なのは、つぎのことに視軸を向けることであろう。すなわち、ロールズ流〈正義の原理〉導出の過程においては、超越論的方法による《この世界の内の正しさとは異質なる》正しさの探究を基盤にしてそこから、この世界の内にもその逸脱せるゆらぎに見出さう（私的所有を超脱する）契機へとはたらきかけ拡張してゆくという方略を採る——もしそういう方略を採っていたならば、謂うところの「挫折もしくは停滞」は無かったはずだ——のではなくて、この世界に支配する・この世界構成と相即する内実をもって支配する（私的所有という）秩序との妥協を探るところに着地点を求めようとしたこと、このことである。

【5】 構案の起点・基点としての、【私の存在承認】と【他者の存在承認】との連関

5-1. 〈ただのひととしての存在〉をよいものとして尊重し承認するところから始める

前章までの考察を承けてこの章では、立岩真也による〈自由の平等〉構案の生かしどころを示し、能力をめぐる正義考の積極的展開へと繋げて、論じてみよう。われわれが立岩による構案からまずなによりも承け継ぎたいと考えるのは、（序章において既に言及しておいたところであるが、）〈ただのひととしての存在〉をよいものとして尊重し承認するところから、人-人間関係と社会の組み立てをめぐる思考を始めようとする構えそのことである。ここに謂うところの〈ただのひととしての存在〉とは、一方において既存のシステム社会のもとでの自己を中心とする利得損害打算感情やひとの存在価値に対する優劣評価観念からは距離をとり——それらへの従順さを欠き——、他方において人-人間の生物学的知見において把握しうる存在条件および（その存在条件に依拠する）心理的諸法則——その

中には人-間の倫理的法則も含まれるだろう——には随順する、そのようなひとの存在のありようを指し示す。そのように捉えておいてよいだろう。

5-2. 私にとっての世界と他者にとっての世界

その性格づけに向けての言い表わし方としては、高度情報消費化社会という性格づけがかなりの的を射得ていると考えられるところの現前のシステム社会。そこでは通用的・通俗的で凡庸な事象の意味づけ方に整形され制御されがちであり、そのことから類似の世界像が描出されやすい状況が作為され設えられているといえよう。しかしここで、事象へのそのような出来合いの意味づけ方が安定的で確かなものとしてひとそれぞれの内面を制圧し尽くしているかと問うてみよう。事象への意味づけのいわば実存的契機がひとそれぞれの生の諸局面に出来ること、そのことが体験の位相では感知されるところからも気づかれるように、上記の問いに対しては否定を以って答えることになる。ひとの生——複雑性と不確定性を不可避的に帯びたそれ——における事象への意味づけ方を論理的に省察することによっても、否定を以っての答えが導出されることになるだろう。出来合いの意味への収束の過程においてさえ、いかなるゆらぎをも生み起こすことなく定常性を帯びた意味秩序に収まり続けることは、ありえないからだ。

外界と自己自身への意味づけ方が各人によって異なりを持つということは、私にとっての世界と他者にとっての世界が異質であり、いずれも切実に大切さを持つということでもある。そしてそのこと自体については（容易にというわけではないにしても）分かり合える、分かり合うことは不可能でないだろう。

5-3. 【私の存在承認】のための道徳的人格の喚起

私の存在承認という目的を実現しようとするために他者の存在を手段にすること、そのことを意識化して吟味の対象にすると想定してみよう。その場合には、それは道理に合わないということが、納得して受け容れられるであろう。しかしひとが、（所有秩序のあり方に焦点を合わせた場合の）私的所有および（能力をめぐる正義のあり方に焦点を合わせた場合の）能力主義が自明視されるほどに深く安定的に規範化されている社会世界で生を営むのであれば、好むと好まざるとにかかわらず、ひとの存在価値へのまなざしに伴って生じうるところの、存在承認をめぐる目的-手段関係に無縁ではありえなくなる。そのような社会世界にあればこそ、先程述べた、〈ただのひととしての存在〉をよいものとして尊重し承認するところから始めようとする、立岩の構案が、世界のあり方を素朴にかつ根底的に問い直すための触発力を豊かに蔵していると言えるのだ。

5-4. 【他者の存在】が快でありうる、という生への構え

〈ただのひととしての存在〉をよいものとして尊重し承認するという対他関係の構え方は、立岩にあっては、【他者の存在】が快でありうる、という生への構えの上部に形成されている。私の世界とは異質な世界をそれぞれに持つ他のひとを私は、私の都合本位に、あるいはまた所定の・私たちの生活世界においても支配力を揮う、システムの機能合理性に準拠して、評価したり制御したりすることを拒否したい。外在する基準や尺度によってなされる評価や制御を断ったところに、断ち切ろうとする意向と同時に、【他者の存在】

が快でありうるという生への構えが生み起こされるわけだが、そのような構えのもとにひとのそれぞれを尊重し合うのがよい、と考える。私の善き生の追求を目的とするときの手段として他のひとを評価したり制御したりする（し合う）、そのようなかわり方よりもずっとよい、と考える。こうした間柄的存在の中での私たちの生への構えを、したがってまた対他関係への構えを、本稿は立岩からとても大切なこととして受け継ぎ考え継ごうとする。

互いの存在が尊重されるべきだということ、そしてまた、互いの存在を承認し合うべきだということ、これはその限りでは異議無く受け容れられる。そうであってみれば、〈ただのひととしての存在〉をよいものとして尊重し承認することがなされてよいはずではないか。何ができるとかできないとか、できる度合においてだれがだれより優れているとか劣っているとか、そのような評価が必要になる生活場面はたしかにあるだろう。とはいえ、しかし、われわれが人間関係の正しさや社会構成原理の正しさを第一義的に大切なことだと考えるのであれば、能力主義を基軸に据えてひとの存在価値を評価するという意識態勢に飲み込まれ従属しているわけにはいかないはずだ。ひとそれぞれについて優先順位をつけられるように〈ただのひととしての存在〉をよいものとして尊重し承認することがなされ得るだろうか？ 優先順位をつけるのを正当化する根拠はどこにも無いはずだ⁵⁾。かくしてわれわれは（立岩とともに）、〈ただのひととしての存在〉に向けて【存在の自由】が平等に承認され合うべきことを、そしてそのための手段として、分かち合うことの可能な資源を（富を）、【存在の自由】の承認度合について格差をもたらすことのないように分配すべきことを、主張することになる。そのような互いの関係・行為の積み重ねを通じて、その実践的帰結として〈ただのひと〉それぞれが自尊感情を確かなものに築きつつ、存在の尊重の内実を相互関係の中で豊饒化することが可能となるはずだ、と主張することにもなる。

【結びに代えて】「能力をめぐる正義」考にとってのひとまずの礎石

〈能力をめぐる正義考〉の歩みを辿るために、ひとまずは所有に焦点を合わせて〈正しさ〉とはどうあるべきかを——所有秩序の正しさとはどうあるべきかを——、最も土台となりそうなところから考えてみようとした。そのような意図から、所有秩序に関する主要な理説を、まずなによりもジョン・ロックに、次いでロバート・ノージックに、さらには現代リベラリズムにおける所有秩序観に——能力の所有という次元も含めたそれに——、視線を投じて考察した。これらの考察を承けて次なる段階として、本稿の問題関心にとって積極的に引き取ることでできる構想を外見上、指し示しているように感じられるものとして（より正確には、積極的に引き取るに値する構想上の可能性契機を内蔵しているように予感されるものとして）、ジョン・ロールズによる構想に視軸を向けることにした。その構想をいかに引き取ればよいかを考える過程を経ることによって、正しさの・正しさについての探究を深めるためにはロールズの何を継承しどの点を拒斥すべきなのか、その輪郭だけは見えてきた。そうして、正しさの・正しさについての探究をロールズの限界と我々が捉えるところを越えて深めようとする道行きを選び採ろうとする場合、耳を傾けるべき構案として立岩真也による〈自由の平等〉構案を見出した。本稿では第5章（[5]）

で、彼による構案を〈能力をめぐる正義考〉という立場からいかにして生かすことができるか、その生かしどころの基点に絞って略述することにした。立岩による構案はポテンシャルに満ちているので、我々の関心に即して掘り起こすべき要素が多大に残されている。それら要素から汲み採れることを汲み採って議論展開を試みることは今後の課題として、本稿はひとまずここで筆を擱くことにする。

註

- 1) 鷺田清一が「所有」の項目解説として、「所有」と「固有性」の意味を property が併せ持っていることを指摘している。本文でのこの箇所の論及にあたって、そのきっかけを、鷺田によるその指摘から得ている。なお、鷺田による「所有」の項目解説が収載されているのは、永井均・中島義道他編（2002年）『事典 哲学の木』544-547頁であり、上記の指摘はその中の545頁に見られる。
- 2) なお、ここで、後に論及する事柄との関係づけを明瞭化させる意図をもって、補足的説明を付しておこう。自存視された個体身体をこの私が所有し支配するのを当然視する、という想念に表われるような意味秩序系に閉じてしまうのではなくて、そこからの脱却可能性の模索を呼び起こす“開口部”を、ロックの理説は併せ持っていた。その“開口部”にあたるのが、次項で述べる「但し書き」による所有権の抑制である。
- 3) 引用した箇所でロックは、資源への独占的な所有に対する警告を、次のような理由を以てなしている。独占的な所有は「自然法」に反するから、さらには「自然法」の起源にロックが位置づけるところの神（キリスト教のそれ）の意思に反するから、つまり、あらゆる資源を人々の利用に供する（贈与している）神の意思に反することになるから、という理由で認容できない、というわけだ。そのことを承知しつつも、挙げられている理由の内容を我々の問題関心に即して捉え直すとすれば、ロックをしてそのような思考へと到らしめたいいわば直観的引っ掛かりとして、（本文で記したところの）「私的所有を正当化することについての根拠薄弱さ」への引っ掛かりが生じていたであろうこと、そのことが考慮に入れられてよいだろう。けだし、神による人・間への資源の贈与は、溢れんばかりの資源（富）の湧出を恒常的に体现するというふうにはなっていない——そのことはロックも認めざるを得ないところである——のだから、そうであれば、私的所有秩序のもとでは資源（富）の利用に関して軽視し得ない弊害が生じるということ、そのことには必然性を見て取るべきことになる。
- 4) ここに記した論脈に関連して、ロールズの論立てにおいては〈正しさ〉の探究と〈実行可能性〉の探究とがどのような比重をもって関係づけられているのか、という論題を提起しうる。『正義論』第一部の特に「原初状態」についての叙述部分——〈正義の原理〉を発見し構成しようとする脈絡——に重点を置いて見る限りでは、〈正しさ〉の探究が基盤をなしているかのように受けとめることができるけれども、『正義論』第三部からは、現にある生活世界の内での（正義原理の）〈実行可能性〉についての探究の方に重点が置かれていることがわかる。さらにロールズ自身によるその後の（主に1980年代以降の諸著作に見られる）『正義論』への自己省察とも言えるであろう論及からは、“自由民主主義的文化伝統に立つアメリカ合衆国社会”に議論の足場を据えて、その安定的統合をもたらすべく実行可能な正義の原理およびその制度化と実践のあり方を明らかにする、という方面に力点を置いた内容へと傾斜していることがわかる。

なお、こうした論題およびそれに纏わる問題圏の広がりについて示唆に富む記述が見られるのが、[Kukathas, Chandran & Pettit, Philip, 1990] である。

5) この論脈に対する通俗的な誤認を防遏するために、念のために記しておこう。この論脈は、互いの存在を承認し合うことに逆行する行為への社会的制裁という位相すら欠く、そのような社会のありかたに結びつくのでは、まったくない（そのような懸念は無用である）。ひとそれぞれの存在の尊重を毀損する行為の発生に対しては、それに対応すべく配備された然るべき規範の中で、そうした犯罪行為に対する制裁は当然のことながらなされることになる。さらに付け加えるならば、この論脈は、分かち合いの原理のもとで便益だけを受けて担い得る負担から逃れようとする「ただ乗り人」を多数出現させるという状況をもたらすことにも、まったくならない。「ただ乗り人」を許さないことは原理レベルで既に要請されることだ。

文 献

- 永井均・中島義道他編 2002 『事典 哲学の木』 講談社
立岩真也 2004 『自由の平等』 岩波書店
Attali, Jacques, 1988, *Au Propre et au Figure—Une histoire de la propriete*, Librairie Artheme Fayard
(ジャック・アタリ (山内昶訳) 1994 『所有の歴史』 法政大学出版局)
Kukathas, Chandran & Pettit, Philip, 1990, *Rawls: A Theory of Justice and its Critics*, Polity Press, Cambridge, UK
(チャンドラ・クカサス+フィリップ・ペティット (山田八千子+嶋津格【訳】) 1996 『ロールズ——『正義論』とその批判者たち——』 勁草書房)
Locke, John, 1690, *Two Treatises of Government*, London
(ジョン・ロック (鵜飼信成訳) 1968 『市民政府論』 岩波書店)
Nozick, Robert, 1974, *Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books Inc.
(ロバート・ノージック (嶋津格訳) 1985. 1992 『アナーキー・国家・ユートピア』 木鐸社)
Rawls, John, 1971, *A Theory of Justice*, Harvard University Press
(ジョン・ロールズ (矢島鈞次監訳) 1979 『正義論』 紀伊国屋書店)
Sahlins, Marshall, 1972, *Stone Age Economics*, Aldine Publishing Co.
(マーシャル・サーリンズ (山内昶訳) 1984 『石器時代の経済学』 法政大学出版局)